

「ロータリーの心」を大切に

最近の社会問題、政治問題となったものに、偽装した構造計算でのマンション建設、雪印の牛乳、不二家、ミートホープ、赤福餅等食料、中国製品、砒素毒カレー事件、光市の母子殺人、児童の致傷、女兒殺傷事件等・・・

その根源の一つには自己主張のみ強くて得手勝手な人間が非常に増えたためではなかろうか。林麻須美被告は卒業時に書いた「私の人生は自由」という言葉が思い出される。

さて、ロータリーの考え方は、自分勝手な生き方の正反対である。ご承知の通り、ロータリーの基本にシェルドンはサービス(Service)をおきました。

この「サービス」は邦訳の「奉仕」より遥かに概念が広く、人のためになる行為全体を指しています。例えば電車で不自由な人に席を譲るこれもサービスです。家庭でご夫人方にサービスの精神（これは思いやりの精神とも言える）で接するのは大切だが、これをご夫人方への奉仕と言ったのでは意味が通りません。

広辞林は奉仕の意味として第一に「仕えまつること」第二には「自己の利害をはなれて長上の者や公共のためにつくすこと」と書いてあります。奉仕という言葉は縦社会での意味合いが強いです。

ロータリーで使う「サービス」は論語の中の「忠恕」という言葉に極似である。「忠」というのは内なる真心に背かないこと、自分の倫理観に背かない。「恕」というのは真心による他人への思いやり。なるほど、古い言い方かも知れないが「忠恕」というのがぴったりです。

日本のロータリーの草分けの三代の米山梅吉、井坂孝、村田省蔵ガバナーは service を邦訳にせずそのまま、「サービス」としておられました。

サービスと倫理の関係を考えると、サービス、人のために役立つにはモラルが高くなければなりません。サービスからモラルに通じる、従って以前の手続要覧には、道徳律が記載されていました。ロータリーの綱領(目的)が示すように、ロータリアンには立派なモラルが求められます。

ロータリーの例会は修養の場であるというのが米山梅吉さんたちの考えでした。また、ガイ・ガンディカー氏の言葉をその「ロータリー通解」から引用してみましょう。これは当時のロータリアン達のバイブルでした。

ロータリー・クラブの構成と諸目的

1. 会員個々人の向上

2. 会員の企業を、理想と実際の両面において向上せしめること
3. 会員の属す職種全体向上
4. 会員の家、町、州および国、ならびに社会全体を向上せしめること

この、「人の役に立とう」というサービスの精神は、シェルドンの言うように、より良き社会を造ると共に本人の幸せに通じるという考え方を強調しております。これが、「最も良く奉仕するもの、最も良く報われる(He profits most who serves best.)」というモットーが生まれた所以です。

また、「四つのテスト」に従業員に浸透させる事により、企業を再生させたというテラー氏のやり方にも通じるものです。家庭でもサービスの精神は、幸せな家庭を築くことでしょう。日本のことわざ「積善の家に余慶あり」とか、「情けは人のためならず」というのも、同様な考え方を示しています。この「ロータリーの心」を大事にし、さらに日本がより良い社会へなるよう、そしてロータリアンの方々が、一層幸せで豊かな人生を送られるよう願っています。

Service: Done to help or benefit another or others

■職業奉仕 (Vocational Service)

一般の職業の方が、日常の業務の中での普通に行う職業活動の中での職業奉仕、ヴォケーショナル・サービスができると思います。vocationは「天から与えられた、神様から与えられた、世の中のためになる職業である。」単なる職業はoccupationという。

ロータリーでは、利益をあげようと思って職業奉仕をするものでなく、天職を通じたサービス(職業奉仕)、相手のことを考え、皆のためになるように、そういう職業活動をする。それがビジネスの繁栄につながるという考えです。

■クラブ奉仕 (Club Service)

クラブのためになる考えであり、そして行為です。ですから会員全員ができるし、是非やるべきです。

(例)

- ・例会出席から始まり、欠席時は欠席連絡をする。
- ・クラブ行事にできるだけ協力し出席する。
- ・行事の案内には早く返事をして、事務局の手を煩わさない。

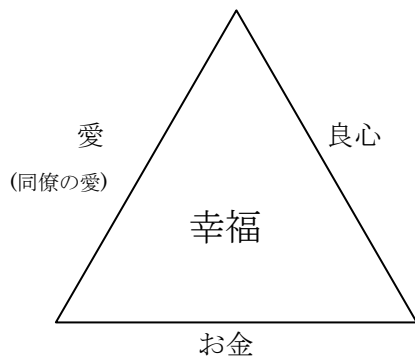
・立派な会員の推薦サービス（奉仕？）と幸福

シェルドンの考え サービスと幸福の三角形

ロータリーを始めたのは、ポールハリスです。そして、ロータリーの基礎にサービスをすえたのは、アーサー・フレデリック・シェルドンです。サービスは奉仕と訳されているが、意味が違います。サービスは相手のことを思い、相手のためになるような行為、相手をおもんばかった行為です。奉仕、仕え奉ることとは概念が同じではありません。サービスの心がけはどんな時でも大切に、例えば家庭でも大切に。相手の事を思う行為は、よい家庭、幸福な家庭につながります。

ビジネスでもサービスの心がけは、シェルドンの言葉を借りれば、「永続的な顧客を得る道」であり、信用を増して、「繁栄への道」です。ですから **He profits most who serves best** 「最も良くサービス(奉仕?)する者 最も良く報われる」というモットーが生まれるのです。「彼は自分のことしか考えない行為、サービスを心がけない行為、それは一時的にはよくても、破滅への道だ」と断言します。

彼のいう幸福への三角形、彼が有名な「ロータリー哲学」で述べている、幸福の三角形を考えてみましょう。(シェルドンのお墓には、この三角形が彫りこまれているそうです。) この三角形の左辺は、愛情であり、友情です。サービスの心、思いやりの心は、同僚からの



愛情、仲間からの愛情につながります。サービスの心を別の角度から言えば、他者への敬意、他者を大事にする心、といっても良い。

右辺は良心であり、これは自分自身を尊敬する事と言っても良いでしょう。自尊心といっても良い。サービス、相手を思いやり、相手のためになる行為をする、そういう人は、自分は良いことをしていると、良心を満足させられるでしょう。他の人からの尊敬を得られます。

下辺にお金が来ます。これは物質的な繁栄です。サービスの精神は、長い目で見れば事業を繁栄させ、収入が増えるでしょう。それがロータリーの考え方です。テラーさんが、四つのテストのもとに会社を運営し、破産しかけていた会社を再生させた、その話とも通じるものであります。この3辺で、幸福への三角形を形成します。

この三辺がないと幸せになれない。そしてこの三角形の基礎は、サービスによって築かれる。無論このサービスは、日本語で「サービスして下さい」などというサービスではありません。サービス、相手のことを考え、相手のために思い、またそのように行動する。それが幸せの元になるというのがシェルドンの考えです。

サービスの精神は、無論世の中のためになります。これは大事なことです。ロータリアンは善意の人たちですから、世の中のためにならないようでは困る。同時に仲間の、友人の

愛情を得るし、自分は良いことをしているという、良心を満足させられる。また他者の信頼、尊敬も得られる。事業の上では、その繁栄、物質的な幸せが得られると考えます。

ロータリーの綱領では、すべての考え、すべての行いの基礎に、サービス(奉仕?)をおこうと述べていますが、その原点はこのような考えです。

なお、前述の“profit”(得るもの)は、すでに述べたように、金銭的な利益のほかに、人の友情、他者の尊敬、自分の満足感など、無形であっても大事なものを含み、そういう意味での得られるものです。

シェルドンは、1921年、スコットランドのエディンバラで行われたロータリーの国際大会で、ロータリー哲学(Philosophy of Rotary)という有名な演説をし、聴衆の熱狂的な歓迎を受けました。前述したのは、彼のその演説の一部です。この演説のタイトルを「ロータリー哲学」と訳すと難しく感じますが、私は理念と訳し、「ロータリー理念」でも良いと思っています。

「ロータリーの心と原点」より

著者：2005-06年 2700地区 ガバナー 廣畑 富雄

(編集者：大和高田 RC 杉田 博)